

令和 2 年 7 月 2 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2014～2019

課題番号：26285196

研究課題名（和文）作文を支援する語彙・文法的事項に関する研究

研究課題名（英文）A lexical and grammatical study for the Japanese composition in Japanese elementary and junior high school

研究代表者

矢澤 真人（YAZAWA, Makoto）

筑波大学・人文社会系・教授

研究者番号：30182314

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 9,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は次の5方面から進めた。児童生徒作文コーパスの構築。これを元にした児童・生徒作文の分析も行った。児童生徒作文の言語学的分析。抽象名詞による文型制約や抽象名詞主題文、形式名詞述語文などの分析を進めた。論理展開と使用語彙・文型に関わる考察や小学生のリーダビリティなど日本語学と国語教育との融合的研究も進めた。作文支援型学習国語辞書の開発。産学教連携の体制を構築し、次世代型時点の基本設計も進めた。児童生徒作文と日本語学習者の作文との比較。広く作文と語彙・文法事項との関わりの分析を進めた。研究成果の社会実装に関わる検討。産学教連携の枠組みで児童生徒の辞書使用実態調査を進めた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本プロジェクトにより、小中学生未校正作文コーパスの構築、論理的文章の展開スキーマの作成と教材への応用、接続表現やねじれ文などの誤用に関する日本語学的分析、学習国語辞典の使用実態調査と作文支援型学習国語辞典の開発等の領域で成果が得られた。はすでに国語教育分野・日本語研究分野で活用され、これを用いた研究も多い。も2020年度使用開始の国語教科書の一部に取り入れられている。は、抽象名詞主題文や接続表現の発達段階分析など、新領域を提供し、研究が進められている。も教科書会社や辞書出版社、電子辞書メーカー、遠隔授業支援機器関連企業などとの産学連携が整い、成果の社会実装が進んでいる。

研究成果の概要（英文）：We promoted in five major fields. First, we constructed a child/student composition corpus. We analysed child/student composition with scientific evidence. Second, We proceeded with a Japanese-language analysis of child/student compositions. We researched on abstract noun subject sentences, formal noun predicate sentences, children's Usage of conjunctions, and so on. Thirdly, we proceeded with the development of a composition-based dictionary and conducted a basic research to provide a next generation dictionary. Fourth, we compared a child/student compositions with the composition of Japanese learners. Fifth, we conducted a study to implement our research results in society. We constructed a framework for "industry-academic-teaching" cooperation and proceeded with a survey of dictionary usage in schools.

研究分野：日本語学

キーワード：作文コーパス 小・中学生 誤用 日本語研究 学習国語辞典 作文教育

## 様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

日本語研究と国語教育は、それぞれの専門性が高められるにつれて、乖離が大きくなり、必ずしも十分な連携がとれていない状況にある。一方で、国際化・情報化が日常となり、児童・生徒が抱える言葉に関する問題も多種多様なものとなっている。これらの問題には、従来の国語教育の枠内では解決困難なものも多く、国語教育と日本語研究との新しいかかわり方を構築し直し、協働して課題に取り組むモデルが必要になっている。

このような状況に際して、研究代表者を中心に、(A)近・現代の文法教育と文法研究の関わりに関する検討と現状分析を試みるパネルディスカッション(平成23年日本語学会高知大会)、(B)国語教育と日本語研究の相互連携モデルの提案と新たな研究領域の創設をテーマにしたパネルディスカッション(平成24年全国大学国語教育学会筑波大会)、(C)平成21年度全国学力学習状況調査(中学校国語)において問題があると判定された中学生の文章推敲能力を題材に、日本語研究と国語教育双方が連携して課題解決型研究を模索した実践型ラウンドテーブル(平成24年全国大学国語教育学会富山大会)など、教育と研究の連携を題材とした公開討論会を、学会レベルで連続して行った。その後も、(B)・(C)の登壇者を軸に研究グループを構成し、児童・生徒の文章作成や文章推敲に関わる問題に対して予備的な調査・研究を進めるなど、基本的な研究協力体制を築いてきた。

児童・生徒の作文に対する修正は、大人が直感的・経験的に思いついた言い方を指示するといった場当たりの対処が一般的で、児童・生徒が自分や他人の文章を推敲する知識や技能はなかなか習得しにくいとされる。文章中の不具合として、「主語の不一致」や「ダラダラ文」「接続詞の多用」など、種々の現象が指摘されているが、多くは表面的に現象を名付けただけで、言語学的な分析が十分なされていない場合が多い。たとえば、「だらだら文」は、直感的にとりよめがないと見なされた文章を名付けたに過ぎず、文の長さや文の構造、特定の語彙の使用など、どのような要素で「ダラダラ感」と関わるのか、十分に分析され、測定されたものではない。上の(C)で討議した課題、中学生の半数が「この絵の特徴は」に対する述部を「どこから見ても目が合います」から「どこから見ても目が合うことです」のように修正できなかったという調査結果についても、一般的な「主語の不一致」ではなく、抽象名詞による文型制約という言語現象が起因して修正の困難さを生みだしている。「彼は世界が平和になることを祈って/願っている」や「この金属には、高熱で元に戻る 特徴/性質 がある」はともに許容されるのに、「彼の願い/?祈りは、世界が平和になることだ」や「この金属の 特徴/?性質 は、高熱で元に戻ることだ」には許容度にかなり差が出てくるなど、抽象名詞は、語によって使える文型が異なる場合があるのだが、こうした現象は日本語研究でも看過され、調査も分析もなされていない。語彙・文法的側面からの研究が欠けていることが、国語教育の直感的な説明を助長しているとも言え、両者が連携・協働して研究体制を作ること、作文・推敲の指導はいつその進展が期待できる。

本研究では、このような観点から、児童・生徒の文章作成や文章推敲に関わる課題を取り上げ、日本語研究と国語教育が協働・連携して取り組むモデルを構築することを目論んだ。

### 2. 研究の目的

本研究は、児童・生徒の文章作成や推敲に関わる語彙・文法的な課題に、日本語研究と国語教育が連携して解決に取り組む課題解決型研究であると同時に、これを通じて、両分野の新しいかかわり方を提案する、モデル構築型研究でもある。

本研究では、上記の予備的研究を発展させて、児童作文コーパスの構築、作文における語彙と文型の日本語学的研究、作文教育と言語事項教育を連携させた指導法開発、作文・推敲を支援する新しいタイプの学習国語辞典の開発、作文支援の観点からの国語教育と日本語教育との融合的な研究という5つの目標を立てた。

では、従来の作文分析において、大人の手の入っていない児童・生徒の未校正作文のデータベースが不足しているところから、全体で300万字程度の児童・生徒の未校正作文データベースを構築することを計画し、これを他部門に提供していつその研究の進展を図ることを図った。

では、抽象名詞による文型制約現象の分析を進めるとともに、文型相互の関係や抽象名詞と形式名詞との関わりなどについて分析・考察を進め、理論化を図ることを目的とする。この過程で明らかにされた抽象名詞の文型情報やコロケーション情報を指導法開発や辞典開発に提供していくとともに、児童のリーダビリティと辞書の語釈に関わる問題や、論理展開とそこで用いられる語彙・文型との関わりに関する考察など、日本語学の分野から国語教育や日本語教育の分野に寄与することを目論んだ。

においては、「主語の不一致」や「ダラダラ文」など、従来指摘されてきた作文上の課題について、児童・生徒の作文中の語彙的特徴や構文的特徴、誤りなどを学年別に分析することで解決することを目論んだ。併せて、作文・推敲につながる語彙・文法指導のプログラムを開発し、小・中学校の現場で実践検証を行い、学習指導法や教材の汎用化を図った。

では、児童や生徒が作文や推敲でつまづいた際に、単語をきっかけに修正を図るための、新しいタイプの学習国語辞典を開発することを目論んだ。この前段階として、児童の学習国語辞典の使用状況と、辞典の記述内容の理解の度合いについて調査を行い、児童が作文や推敲をする際に求める情報を明確化すること、他部門から提供される文型情報やコロケーション情報、誤り

情報などを、単語レベルで提供する方法について検討し、作文支援型学習国語辞典のモデルを作成し、使用者の言語能力、使用目的、使用環境に応じて言語情報を提供する個別対応型国語辞典の基本的設計を構築することも目的とした。

については、とかく乖離しがちな国語教育と日本語教育とを日本語研究の観点から癒合させることを考え、国語教育における児童・生徒作文と日本語教育における作文を比較し、両者の異同について明らかにすることを目標とした。

併せて、研究成果の社会実装をどう行うかについて検討し、「産・学・教」が連携して課題に取り組む態勢作りも目論んだ。

### 3. 研究の方法

本研究は、上記の目的に応じて、作文コーパス部門、日本語研究部門、指導法開発部門、辞典開発部門、日本語教育部門、総括部門の6つの部門で進めた。ベースとなる設計は、において、研究基盤となる児童作文コーパスを構築し、において、そこに現れる文章の不具合を日本語学的観点から分析・検討し、において、作文・推敲指導の教材やカリキュラム開発を進め、において、作文・推敲を支援するための学習国語辞の開発に結びつけていくというものである。さらに、において、海外の日本語学習者や日本にルーツを持たない児童・生徒などの課題を国語教育の課題と比較した。こうした研究活動の連携と知見の集積をにおいて進めることで、総合的な課題解決と新たな研究モデルの構築を図った。

なお、各年次計画と実行状況については、年次報告書に譲り、ここでは省く。

### 4. 研究成果

各年次の研究成果についても、年次報告書に詳しく述べているので、ここでは研究成果の概要とその評価について述べる。

本研究は、日本語研究と国語教育の新しい関係を構築し、提案することを目的の一つに挙げた。研究成果全体で、国内外の言語研究や言語教育分野の学会や学術シンポジウム等における招待講演が30件あることは、本プロジェクトが学界レベルでも評価されていることを表している。さらに、国際学会における発表・招聘講演も30件に及んでいることは、本プロジェクトの研究成果が国際的な情報発信にも大きく寄与していることを表している。

本研究の各部門は、それぞれ注目すべき成果を上げている。まず、の作文コーパス部門においては、児童・生徒未校正作文コーパスを構築し、本研究機関において、試用版コーパスを関連分野の研究者に提供した。これにより、日本語研究や国語教育、日本語教育の各方面において、新たな研究テーマが開拓された。さらに、本研究を基に、新たなコーパスの開発とそれをもとにした研究のプロジェクトも展開している。

の日本語研究部門においては、言語教育と連携する言語研究モデルを提供しただけでなく、日本語研究の新たな研究テーマも開拓した。例えば、児童・生徒作文においては「この絵の特徴はどこから見ても絵の女性と目が合います」のような抽象名詞主題文のねじれがしばしば見られるが、この日本語学的な考察は十分でなかった。本研究では、この現象の分析を進め、主題文や名詞述語文の新たな視点を提供した。併せて、論理展開と文型に関わる考察やリーダービリティの考察など、日本語研究と国語教育・日本語教育との融合的な研究を進展させた。日本語研究分野の学会のフォーラムやシンポジウムでも、本研究の成果を元にした講演や基調報告が行なわれており、本研究が日本語研究分野でも評価されていることが知られる。

の指導法開発部門では、作文と言語事項に関わる分析だけでなく、その社会実装を進めたことが特記される。本研究の成果は、すでに2020年から使用されている小学校国語教科書に反映され、2021年から使用される中学校教科書にも反映されている。

の辞書開発部門では、作文支援型学習国語辞書の開発に伴い、児童・生徒の言語能力や使用環境など、個別の条件に対応した情報提供を行うための基礎研究を進展させた。特に、研究者と教育現場、辞書出版社・電子辞書メーカーを結んだ産学教連携の態勢が構築され、これをもとに次世代型の辞書を開発する新たなプロジェクトも誘発させている。「産・学・教」の枠組みにおいて、小学生の辞書の使用実態調査も進行している。また、研究成果を反映させた国語辞典の編集も進められており、この部門でも研究成果の社会実装が実現している。

の日本語教育部門では、作文における言語事項が関与する課題について、より広く分析が進められた。児童生徒の未校正作文コーパスと日本語学習者の作文コーパスとの比較から、接続表現や条件形式、文章構成の型など、さまざまな観点から考察が行われた。先に触れたように、国際的な学会で、本研究の代表者や分担者が講演を依頼されていることから、本研究の広がりも知られる。

本研究により、「産・学・教」の連携が推進したらことも特筆して良いと思われる。これにより、言語情報提供のための言語研究（一次産業的）企業による言語情報サービスの社会実装（二次産業的）学校における言語情報サービス（三次産業的）全体を視野に入れた、言語情報支援の六次産業化プロジェクトも検討が進められている。

本研究は、十分に意義あるものであったと考えられる。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計52件（うち査読付論文 40件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 宮城信・穴田享巳	4. 巻 13-1
2. 論文標題 児童・生徒の言語生活に関するアンケート調査の分析	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 富山大学人間発達科学部紀要	6. 最初と最後の頁 103-119
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮城信	4. 巻 43
2. 論文標題 児童作文に見る「理由述べ」表現の典型と周辺 児童作文「ゆめ」を資料として	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 富山大学国語教育	6. 最初と最後の頁 22-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 安部朋世・橋本修・関口雄基	4. 巻 11
2. 論文標題 日本語リーダビリティ研究の、国語教育への応用可能性	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日中言語研究と日本語教育	6. 最初と最後の頁 106-115
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松崎史周	4. 巻 56-5
2. 論文標題 児童作文における「語りかけ性」を有する表現の分析 - 1992年と2016年の作文を比較して -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 解釈	6. 最初と最後の頁 2-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松崎史周	4. 巻 28
2. 論文標題 公立高校入試（国語）における文法問題の傾向	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 信大国語教育	6. 最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 勸米良祐太	4. 巻 2
2. 論文標題 文法教育史考察の必要性	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 言葉の学びを考える	6. 最初と最後の頁 38-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 勸米良祐太	4. 巻 45
2. 論文標題 The relationship between grammar education and its "practical use" in prewar Japan	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 人文学教育学会	6. 最初と最後の頁 53-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 勸米良祐太	4. 巻 10
2. 論文標題 大学生の日本語表現における文法的不具合の分析	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 浜松学院大学学習支援センター紀要	6. 最初と最後の頁 39-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松崎史周	4. 巻 2018-秋
2. 論文標題 「書くこと」と「情報の扱い方に関する事項」をつなぐ「文型」の学習	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 小学国語通信 ことばだより	6. 最初と最後の頁 6-7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松崎史周	4. 巻 61-2
2. 論文標題 論理的な文章を書くための語彙指導 - 語句の選定と指導の系統性を中心に -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 教育科学国語教育	6. 最初と最後の頁 16-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 矢澤真人	4. 巻 7
2. 論文標題 コーパスによる辞書の記述内容の検証	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 講座日本語コーパス コーパスと辞書	6. 最初と最後の頁 139-164
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中佑	4. 巻 72
2. 論文標題 「によると/によれば」による『引用』	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 文藝言語研究	6. 最初と最後の頁 99-119
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 田中佑	4. 巻 73
2. 論文標題 情報リソースを示す文型について アカデミック・ジャパニーズにおける引用表現の検討	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 文藝言語研究	6. 最初と最後の頁 59-75
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 田中佑	4. 巻 107
2. 論文標題 形式・機能に基づく引用表現の分類と体系	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 表現研究	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松崎史周	4. 巻 32
2. 論文標題 「論理的思考力・表現力」とそれを支える語彙力の育成をめざして	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 中学国語通信 道標	6. 最初と最後の頁 12-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 松崎史周	4. 巻 27
2. 論文標題 小学校「書くこと」の学習を支える文法の知識・技能	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 信大国語教育	6. 最初と最後の頁 23-35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 勸米良祐太	4. 巻 44
2. 論文標題 大正期から昭和前期にかけての中学校文法教育の変化 - 文の成分の取り扱いに着目して -	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 人文科教育研究	6. 最初と最後の頁 97-108
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 松崎史周	4. 巻 48
2. 論文標題 国語科教育における「思考」「論理」に関わる語彙の指導 - 論理的な文章を書くことの学習指導と関連させて -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本女子体育大学紀要	6. 最初と最後の頁 153-162
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 塚田泰彦	4. 巻 541
2. 論文標題 教師の経験知を授業構想力につなぐ方法	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 月刊国語教育研究	6. 最初と最後の頁 4-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 塚田泰彦	4. 巻 42-1
2. 論文標題 国語科教育論の転回	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 教育学系論集	6. 最初と最後の頁 55-62
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -



1. 著者名 山室和也	4. 巻 540
2. 論文標題 国語教育におけるコーパス活用の可能性	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 月刊国語教育研究	6. 最初と最後の頁 28-31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yuriko Sunakawa	4. 巻 33
2. 論文標題 Compilation of Japanese Learners' dictionaries	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Journal of Japanese Linguistics	6. 最初と最後の頁 15-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 安部朋世・神谷昇・小山義徳・西垣知佳子	4. 巻 66-2
2. 論文標題 大学生に対する品詞の理解度調査からみた英文法学習と国語科文法学習との連携の可能性	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 千葉大学教育学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 59-64
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 勸米良祐太・松崎史周	4. 巻 8
2. 論文標題 児童作文における「修飾関係の不具合」の分析	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 浜松学院大学学習支援センター紀要	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松崎史周	4. 巻 62巻5・6号
2. 論文標題 児童作文における「理由述べ」表現の分析 - 「将来の夢」に関する作文の場合 -	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 『解釈』	6. 最初と最後の頁 12-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 富士原紀絵・宮城信・松崎史周	4. 巻 4
2. 論文標題 児童生徒作文の基礎的研究 - 児童生徒作文コーパスの構築と活用 -	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 『子ども学研究』	6. 最初と最後の頁 9-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松崎史周	4. 巻 1
2. 論文標題 教員養成課程における文法指導力育成の試み - 「文法指導論」の実践を通して -	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 『言葉の学びを考える』	6. 最初と最後の頁 24-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松崎史周	4. 巻 47
2. 論文標題 小麦粉粘土活動における幼児のオノマトペ	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『日本女子体育大学紀要』	6. 最初と最後の頁 93-99
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山下 直	4. 巻 52
2. 論文標題 語彙力育成の観点から見た国語科の言語活動	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 『子どもと創る「国語の授業」』	6. 最初と最後の頁 44-47
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 勸米良祐太	4. 巻 43
2. 論文標題 明治中期における中学校作文教科書の文体 『日用文鑑』改訂過程に着目して	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 『人文科教育研究』	6. 最初と最後の頁 55-68
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 勸米良祐太	4. 巻 80
2. 論文標題 明治35年中学校教授要目による文法教育の変化 領域「文法及作文」の設定に着目して	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 国語科教育	6. 最初と最後の頁 15-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 勸米良祐太	4. 巻 17
2. 論文標題 中学校教授要目改正 (明治44年) における領域「作文」設定の要因	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 国語教育史研究	6. 最初と最後の頁 48-57
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 島田康行	4. 巻 62
2. 論文標題 「高大接続の改革は国語教育に何をもたらすか」	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 『指導と評価』	6. 最初と最後の頁 12-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 矢澤真人	4. 巻 1
2. 論文標題 近代日本における文法教育の目的と品詞分類	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 韓国言語文化学会2016年度春季国際学術大会発表論文集	6. 最初と最後の頁 17-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 安部朋世	4. 巻 1
2. 論文標題 文法とコーパスデータ - 「特徴」の内容を説明する文型と「性質」の内容を説明する文型 -	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 韓国日本言語文化学会2016年度春季国際学術大会発表論文集	6. 最初と最後の頁 28-33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 安部朋世	4. 巻 30
2. 論文標題 内容補充の連体修飾節を受ける抽象名詞の構文類型	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 『日本言語文化』(韓国日本言語文化学会)	6. 最初と最後の頁 7-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 橋本修	4. 巻 31
2. 論文標題 内容節のテンス解釈について - 非発話時基準を中心に -	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 『日本言語文化』（韓国日本言語文化学会）	6. 最初と最後の頁 7-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 矢澤真人	4. 巻 36
2. 論文標題 明治以降日本語の文法用語の成立と品詞分類表	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 Language Facts and Perspectives（韓国延世大学校言語文化研究所）	6. 最初と最後の頁 25-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 安部朋世	4. 巻 2016年3月号
2. 論文標題 書くことを支援する日本語研究 - 国語教育と日本語研究との新たな連携から -	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 『月刊国語教育研究』（日本国語教育学会）	6. 最初と最後の頁 4-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 勸米良祐太	4. 巻 5
2. 論文標題 いわゆる「国語科教育法」の模擬授業における省察の実態	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 『浜松学院大学教職センター紀要』	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮城信	4. 巻 40
2. 論文標題 児童・生徒作文に見る文末表現の発達 作文の表現指導との関わりから	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 『富山大学 国語教育』	6. 最初と最後の頁 22-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮城信	4. 巻 10巻2号
2. 論文標題 児童作文に見る程度修飾表現の発達	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 『富山大学 人間発達科学部紀要』	6. 最初と最後の頁 291-297
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山下直	4. 巻 518
2. 論文標題 教科書教材と国語単元学習	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 『月刊国語教育研究』(日本国語教育学会)	6. 最初と最後の頁 4-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山下直	4. 巻 34巻13号
2. 論文標題 「大学初年次における『書くこと』の指導」	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 『日本語学』(明治書院)	6. 最初と最後の頁 2-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松崎史周	4. 巻 61巻5・6月号
2. 論文標題 中学生の作文に見られる『主述の不具合』の分析 - 出現傾向から学習者の表現特性を探る -	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 『解釈』（解釈学会）	6. 最初と最後の頁 12-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松崎史周	4. 巻 46
2. 論文標題 国語教育における『だらだら文』の捉え方と扱い	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 『日本女子体育大学紀要』	6. 最初と最後の頁 111-121
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 矢澤真人	4. 巻 1
2. 論文標題 われわれは何を「いのる」のか - 「いのり」の言語文化的アプローチ -	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 『平和言語学研究』（平和言語研究会）	6. 最初と最後の頁 17-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山下直	4. 巻 41
2. 論文標題 中学生の作文に見られる『 八』の重複	5. 発行年 2014年
3. 雑誌名 人文科教育研究	6. 最初と最後の頁 27-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 矢澤真人	4. 巻 5
2. 論文標題 抽象名詞主題文研究の意義	5. 発行年 2014年
3. 雑誌名 『漢日語言対比研究論叢』	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 矢澤真人	4. 巻 1
2. 論文標題 「われわれは何を祈るのか 「いのり」の言語文化的アプローチ」	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 『平和言語学研究』	6. 最初と最後の頁 17-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 勅米良祐太	4. 巻 77
2. 論文標題 中学校教授要目改正 (明治44年) による文法教科書の変化 - 作文教育への『付帯』的指導に着目して	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 『国語科教育』	6. 最初と最後の頁 22-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 橋本修	4. 巻 2015-3
2. 論文標題 作文力を育てる "学習用語" と習得活用ヒント	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 『国語教育』	6. 最初と最後の頁 50-53
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -



〔学会発表〕 計90件（うち招待講演 30件 / うち国際学会 30件）

1. 発表者名 矢澤真人
2. 発表標題 それぞれの利用者が求める言語情報を「それぞれのもとする形で」提供する次世代型辞典の開発
3. 学会等名 第1回筑波大学産学連携シンポジウム（筑波大学）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 矢澤真人
2. 発表標題 詞辞論とモダリティ
3. 学会等名 日本語日本文化フォーラム2019（中国復旦大学）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 矢澤真人
2. 発表標題 副詞的修飾の重層的把握
3. 学会等名 国際連語論学会（東洋大学）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 矢澤真人・尹雪揚
2. 発表標題 「トコロ」の接続用法
3. 学会等名 亜非研究視闚下の日本学国際学術研討会（中国上海外国語大学）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 矢澤真人
2. 発表標題 近代日本文法教育史における品詞分類のスタンダードとエポック
3. 学会等名 中日韓語言文化比較研究国際研討会（中国北京外国語大学）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 矢澤真人
2. 発表標題 現代社会の課題に日本語研究はどう向き合うか
3. 学会等名 第十屆漢日対比語言学研討会（中国蘇州大学）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 矢澤真人
2. 発表標題 名詞から考える文法教育
3. 学会等名 日本語文法学会公開フォーラム「国語教育と文法」（早稲田大学）（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 橋本修
2. 発表標題 「認識時」拡張解釈の可能性をめぐって
3. 学会等名 韓国日本語文化学会2018年春季国際学術大会（韓国光雲大学）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 橋本修
2. 発表標題 中国語の複文における日本語訳について
3. 学会等名 2018年度中日応用翻訳学シンポジウム（中国華僑大学）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 安部朋世
2. 発表標題 語の意味関係と文章の展開 - 文章作成調査の結果から -
3. 学会等名 韓国日語教育学会2018年度春季国際学術大会（韓国光雲大学）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 安部朋世・橋本修・関口雄基
2. 発表標題 小学生の抽象語理解度測定をめぐって
3. 学会等名 全国大学国語教育学会国語科教育研究第134回大会（大阪教育大学）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 松崎史周
2. 発表標題 言葉に関わる「知識及び技能」を「思考力、判断力、表現力等」の育成を通して、いかに具現化するか(1) - 語彙 - ・「書くこと」の育成における「思考に関わる語句」の扱い -
3. 学会等名 全国大学国語教育学会第134回大会（大阪教育大学）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 松崎史周
2. 発表標題 「書き言葉の文体」を意識化させる文法指導
3. 学会等名 全国大学国語教育学会第135回大会（武蔵野大学）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 勸米良祐太
2. 発表標題 植民地朝鮮における文法教育 『日本口語法及文法教科書』に着目して
3. 学会等名 全国大学国語教育学会第135回大会（武蔵野大学）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山室和也・宮城信・松崎史周・中村和弘
2. 発表標題 これからの「国語の特質」の探究と指導のあり方（2）- 汎用的な知識・技能としての文法の指導 -
3. 学会等名 全国大学国語教育学会 第132回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 勸米良祐太
2. 発表標題 大正期から昭和前期にかけての文法教育の変容 - 文の成分の取り扱いに着目して -
3. 学会等名 日本読書学会 第61回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 塚田泰彦
2. 発表標題 詩の教育への再接近
3. 学会等名 平成29年度第29回日本国語教育学会茨城支部研究会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 矢澤真人
2. 発表標題 基調講演「言語支援ツールの開発と言語調査」
3. 学会等名 大連大学2017年度国際シンポジウム（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 矢澤真人
2. 発表標題 「前近代」の「言語分析概念」に関わる「日中」交流
3. 学会等名 「東アジアの文化的基本概念とその近・現代化」キックオフフォーラム
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 安部朋世
2. 発表標題 抽象名詞の内容を説明する文型の比較 - 「特徴」「性質」「根拠」「理由」 -
3. 学会等名 文教大学文学部開設30周年記念 2017年度 日中韓三国 日本言語文化に関する国際学術シンポジウム
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 矢澤真人
2. 発表標題 招請発表「個別対応型国語辞典をめざして 次世代の日本語辞書のグラウンドデザインと基礎調査ー」
3. 学会等名 文教大学文学部開設30周年記念 2017年度 日中韓三国 日本語文化に関する国際学術シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 橋本修・安部朋世・関口雄基
2. 発表標題 学習用国語辞典の語釈の難易度をめぐって
3. 学会等名 全国大学国語教育学会 第133回福山大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 松崎史周・各務めぐみ・中川乃美
2. 発表標題 作文添削時における教師の着眼点 - 言語形式面を中心として -
3. 学会等名 全国大学国語教育学会 第133回福山大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 田中佑
2. 発表標題 「ように」引用文の文脈制約
3. 学会等名 第22回日本語文法教育研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 橋本修・安部朋世・関口雄基
2. 発表標題 学習用国語辞典語彙中語彙のリーダビリティについて
3. 学会等名 第22回日本語文法教育研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 松崎史周・桐川敦子・望月久也
2. 発表標題 小麦粉粘土活動における幼児のオノマトペ
3. 学会等名 日本保育学会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 松崎史周
2. 発表標題 文の構成に関する指導 - 作文の推敲を視野に入れた学習指導のデザイン -
3. 学会等名 韓国日語教育学会2016年度第29回国際学術大会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 宮城信
2. 発表標題 日韓大学生の随筆文の対照分析
3. 学会等名 韓国日語教育学会2016年度第29回国際学術大会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 矢澤真人
2. 発表標題 基調講演「作文支援から言語総合学へ 課題解決型研究の可能性 」
3. 学会等名 韓国日語教育学会2016年度第29回国際学術大会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 安部朋世
2. 発表標題 作文支援と文型 - 抽象名詞の内容を説明する諸文型 の検討を中心に -
3. 学会等名 韓国日語教育学会2016年度第29回国際学術大会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 松崎史周
2. 発表標題 文の構成に関する指導 - 作文の推敲を視野に入れた学習指導のデザイン -
3. 学会等名 第131回全国大学国語教育学会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 勸米良祐太
2. 発表標題 大正期中学校における作文教育と文法教育の関係
3. 学会等名 第131回全国大学国語教育学会
4. 発表年 2016年



1. 発表者名 齋藤匠偉・矢澤真人
2. 発表標題 児童生徒作文コーパスデータから見た接続詞と接続助詞
3. 学会等名 第131回全国大学国語教育学会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 長田友紀・矢澤真人・大塚貴史・籠島千裕
2. 発表標題 小学生の国語辞典の使用実態について
3. 学会等名 第131回全国大学国語教育学会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 矢澤真人
2. 発表標題 近代日本における文法教育の目的と品詞分類
3. 学会等名 韓国日本語文化学会2016年度春期国際学術大会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 安部朋世
2. 発表標題 文法とコーパスデータ
3. 学会等名 韓国日本語文化学会2016年度春期国際学術大会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 橋本修
2. 発表標題 リーダビリティと言葉の研究
3. 学会等名 韓国日本語文化学会2016年度春期国際学術大会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 橋本修・安部朋世
2. 発表標題 作文の言語的評価とリーダビリティ
3. 学会等名 第131回全国大学国語教育学会東京大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 宮城信
2. 発表標題 児童作文に見る感情・感覚・評価を表す表現の使用状況
3. 学会等名 第53回表現学会全国大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 宮城信
2. 発表標題 日本語の相互行為表現を支える述部の語彙論的分析
3. 学会等名 2016年語彙研究会大会（第14回大会）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 島田康行
2. 発表標題 国語教育と外国語教育との連携を考える - 国語教育の視点から
3. 学会等名 全国大学国語教育学会第130回新潟大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 山下直
2. 発表標題 言語力向上を図る小中一貫教育の視点
3. 学会等名 平成26～28年度 春日部市教育委員会委嘱 小中一貫教育研究発表会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 山下直
2. 発表標題 言葉の豊かな使い手を育てる授業実践に向けて～すべての教科の中核としての国語科という観点から～
3. 学会等名 島根国文学会平成28年度研究大会〔松江・安来大会〕（招待講演）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 矢澤真人
2. 発表標題 課題解決型の共同研究を目指して
3. 学会等名 韓国日語教育学会2016年度国際学術大会ワークショップ（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 矢澤真人
2. 発表標題 次世代の日本語（国語）辞典の開発と日本語研究の寄与
3. 学会等名 大連大学第七回中日韓日本語文化研究国際フォーラム（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 矢澤真人
2. 発表標題 場面对応日本語辞典の開発をめぐる
3. 学会等名 韓国日本語文化学会・日本文教大学・中国北京外国語大学共同開催2016年度秋季国際学術大会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 矢澤真人
2. 発表標題 日本の初等教育における論理展開語の語彙拡張について
3. 学会等名 東アジア若手研究者合同フォーラム「日本研究の新課題と新展開」（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 矢澤真人
2. 発表標題 グローバル時代における母語教育の課題
3. 学会等名 第4回北京師範大学・筑波大学学術交流会「東アジアの近未来型共生社会と日中の言語文化交流」（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 安部朋世
2. 発表標題 日本語の抽象名詞とその内容を表す諸文型
3. 学会等名 中・日・韓言語文化比較研究シンポジウム（北京外国語大学・韓国日本語文化学会）（国際学会）
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 矢澤真人
2. 発表標題 形式名詞存在文と形式名詞述語文
3. 学会等名 2015東亜地区師生共同討論会「日語教育と日本研究」（国際学会）
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 矢澤真人
2. 発表標題 日本語文法教育史における品詞分類表の位置づけ
3. 学会等名 中・日・韓言語文化比較研究シンポジウム（北京外国語大学・韓国日本語文化学会）（国際学会）
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 矢澤真人
2. 発表標題 明治以降日本語の文法用語の成立と消長
3. 学会等名 延世大学国際シンポジウム「近代東アジアにおける言語の接触と交流」（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 安部朋世
2. 発表標題 作文に見られる抽象名詞主題文について
3. 学会等名 第7回漢日対比語言学研討会（国際学会）
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 安部朋世
2. 発表標題 名詞述語文の叙述名詞句について
3. 学会等名 韓国日本語文化学会2015年度春季国際学術大会（国際学会）
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 吉野貴志・韓滄
2. 発表標題 中国人日本語学習者における接続表現の使用状況に関する一考察 日本語母語話者との比較から
3. 学会等名 第7回漢日対比語言学研討会（国際学会）
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 宮城信
2. 発表標題 コーパスを利用した作文分析について 児童・生徒作文に見る認識のモダリティ表現
3. 学会等名 第7回漢日対比語言学研討会（国際学会）
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 矢澤真人
2. 発表標題 抽象名詞存在文と形式名詞存在文
3. 学会等名 第7回漢日対比語言学研討会（国際学会）
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 松崎史周
2. 発表標題 作文におけるストレスフルな文章について
3. 学会等名 第7回漢日対比語言学研討会（国際学会）
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 勸米良祐太
2. 発表標題 明治35年中学校教授要目における文法教育および作文教育の課題 - 領域『文法及作文』の設定に着目して -
3. 学会等名 全国大学国語教育学会第129回筑波大会
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 宮城信・松崎史周
2. 発表標題 児童作文における『理由述べ』表現
3. 学会等名 全国大学国語教育学会第129回筑波大会
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 宮城信
2. 発表標題 児童作文に見る程度修飾表現の発達
3. 学会等名 全国大学国語教育学会第128回兵庫大会
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 山下直
2. 発表標題 学習者が書いたあらすじ文に見られる『〇〇八』の出現傾向
3. 学会等名 全国大学国語教育学会第128回兵庫大会
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 松崎史周
2. 発表標題 戦後作文・文法指導における『だらだら文』の扱い
3. 学会等名 全国大学国語教育学会第128回兵庫大会
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 松崎史周
2. 発表標題 中学生の作文に見られる主述不照応と学習者の修正状況
3. 学会等名 高校実践国語教育研究会平成27年度第1回月例会
4. 発表年 2015年



1. 発表者名 矢澤真人
2. 発表標題 近代国語辞典における「見出し」と情報化時代の検索法
3. 学会等名 語彙・辞書研究会第48回研究発表会シンポジウム「国語辞典の見出しの立て方 複合辞・造語成分などの扱いを中心に 」(招待講演)
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 安部朋世・橋本修
2. 発表標題 いわゆるモナリザ文に対する国語教育学・国語学の共同的アプローチ
3. 学会等名 第126 回全国大学国語教育学会名古屋大会
4. 発表年 2014年

1. 発表者名 宮城信
2. 発表標題 コミュニケーションツールとしてのコトワザの表現価値
3. 学会等名 第126 回全国大学国語教育学会名古屋大会
4. 発表年 2014年

1. 発表者名 松崎史周
2. 発表標題 中学生の作文に見られる『主述の不具合』の分析 出現傾向と発生要因を探る
3. 学会等名 第126 回全国大学国語教育学会名古屋大会
4. 発表年 2014年

1. 発表者名 勸米良祐太・松崎史周
2. 発表標題 文法ブーム期以降の『文法的誤り』枠組みの再検討 森岡健二、永野賢を中心に
3. 学会等名 第126回全国大学国語教育学会名古屋大会
4. 発表年 2014年

1. 発表者名 矢澤真人
2. 発表標題 基調講演「日本語の祈りの時空間」
3. 学会等名 東アジア日本研究国際学術フォーラム「東アジアの時空間で日本研究を論ずる」(招待講演)
4. 発表年 2014年

1. 発表者名 石塚直子
2. 発表標題 語釈を書く 辞典編集現場の指導と各語の調査結果から
3. 学会等名 日本語学習辞書科研第7回全体研究会
4. 発表年 2014年

1. 発表者名 矢澤真人
2. 発表標題 基調講演「作文支援型学習辞典の開発」
3. 学会等名 日本語学習辞書科研第7回全体研究会(招待講演)
4. 発表年 2014年

1. 発表者名 橋本修
2. 発表標題 連体修飾節のテンスと名詞句のindividual/stage level
3. 学会等名 韓国日本語文化学会2014年度秋季国際学術大会
4. 発表年 2014年

1. 発表者名 安部朋世
2. 発表標題 抽象名詞の内容を表す「抽象名詞八 - コトダ」文
3. 学会等名 韓国日本語文化学会2014年度秋季国際学術大会
4. 発表年 2014年

1. 発表者名 安部朋世
2. 発表標題 抽象名詞の内容を表す「抽象名詞八 - コトダ」文
3. 学会等名 日本語文法学会第15回大会（招待講演）
4. 発表年 2014年

1. 発表者名 矢澤真人
2. 発表標題 学術講演「日本語の文法と日本語教育」
3. 学会等名 西南大学外国語学院学術講演会（招待講演）
4. 発表年 2014年

1. 発表者名 伊澤亮平・橋本修
2. 発表標題 生活作文における段落と接続詞の分布
3. 学会等名 全国大学国語教育学会第127回筑波大会
4. 発表年 2014年

1. 発表者名 吉野貴志・越智仁紀・矢澤真人
2. 発表標題 作文支援型学習国語辞典における接続詞の記述について
3. 学会等名 全国大学国語教育学会第127回筑波大会
4. 発表年 2014年

1. 発表者名 宮城信
2. 発表標題 ことわざの表現価値と教育
3. 学会等名 全国大学国語教育学会第127回筑波大会
4. 発表年 2014年

1. 発表者名 松崎史周・稲井達也・山下直・勘米良祐太
2. 発表標題 小・中学生における主述不照応の修正状況
3. 学会等名 全国大学国語教育学会第127回筑波大会
4. 発表年 2014年

1. 発表者名 勸米良祐太
2. 発表標題 中学校教授要目改正（明治44年）による文法教科書の変化 - 作文教育への「附帯」的指導に着目して -
3. 学会等名 全国大学国語教育学会第127回筑波大会
4. 発表年 2014年

1. 発表者名 宮城信
2. 発表標題 文体の慣用句
3. 学会等名 平成26年 富山大学国語教育学会
4. 発表年 2014年

1. 発表者名 Muslima Abduqodirova・矢澤真人
2. 発表標題 ウズベク人学習者の日本語作文における仮定条件形式 - 日本語母語話者との比較 -
3. 学会等名 第19回文法教育研究会
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 宮城信・今田水穂
2. 発表標題 『児童・生徒作文コーパス』の設計
3. 学会等名 第7回コーパス日本語学ワークショップ
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 安部朋世・橋本修
2. 発表標題 名詞句の叙述的用法をめぐる諸問題
3. 学会等名 北京師範大学第三回学術交流会「グローバル時代の中日共同研究」
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 矢澤真人・安部朋世
2. 発表標題 「ことにある」構文について
3. 学会等名 北京師範大学第三回学術交流会「グローバル時代の中日共同研究」
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 吉野貴志
2. 発表標題 作文支援型学習国語辞典と生徒作文の接続詞
3. 学会等名 北京師範大学第三回学術交流会「グローバル時代の中日共同研究」
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 石塚直子
2. 発表標題 「国語辞典の使用状況調査」報告 - 日本語学習者（上級・超級）を対象に
3. 学会等名 北京師範大学第三回学術交流会「グローバル時代の中日共同研究」
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 安部朋世
2. 発表標題 基調講演「抽象名詞主題文に関する日本語学的アプローチ」
3. 学会等名 北京外国語大学国際フォーラム「日本語作文と日本語研究」(招待講演)
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 矢澤真人
2. 発表標題 基調講演「作文支援型辞典と日本語研究」
3. 学会等名 北京外国語大学国際フォーラム「日本語作文と日本語研究」(招待講演)
4. 発表年 2015年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 塚田泰彦・甲斐雄一郎・長田友紀	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 197
3. 書名 初等国語科教育	

1. 著者名 庵功雄・石黒圭・砂川有里子・俵山雄司・野田尚史・ポリー・ザトラウスキー・前田直子・丸山岳彦・山室和也・渡辺文生	4. 発行年 2017年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 277
3. 書名 時間の流れと文章の組み立て 林言語学の再解釈	

〔産業財産権〕

〔その他〕

作文を支援する語彙文法的事項に関する研究プロジェクト  
<https://sites.google.com/site/sakubunshienproject/>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	安部 朋世  (ABE TOMOYO)  (00341967)	千葉大学・教育学部・教授   (12501)	
研究分担者	宮城 信  (MIYAGI SHIN)  (20534134)	富山大学・学術研究部教育学系・准教授   (13201)	
研究分担者	松崎 史周  (MATSUZAKI FUMICHIKA)  (20634380)	国土館大学・文学部・准教授   (32616)	